

## インドネシア・バリ島における Palm Leaf Manuscripts について

三保サト子 ・ 三保忠夫  
(国文教室) (島根大学教育学部)

On the Palm Leaf Manuscripts “Lontar” in Bali, Indonesia

Satoko MIHO, Tadao MIHO

Key Words : Palm-leaf-manuscripts, Baiyo, Lontar, Bali  
キーワード：パーム・リーフ写本, 貝葉, ロンタル文書, バリ島

Abstract : The present description is an on-the-spot investigation into the process of the making the Palm Leaf Manuscripts “Lontar”, the forms of them, the contents of them, and also report on some institution for conservation and research on “Lontar” in Bali, Indonesia.

### はじめに

インドネシアのバリ島, また, ロンボク島, その他では, 古くからヤシの葉に文字・絵を筆刻してきた。そのために用意されたヤシの葉をロンタル Lontar (lontars) といい, 更には, これによって作成された典籍・文書, 写本をもロンタルという。

ロンタルとは, “タル tal の木の葉 ron” を意味する rontal の音の倒置した語であるとされる。

In Balinese the palmyra palm is named *tal* (deriving from *tala*, the Sanskrit name for the talipot palm), and this is reflected in the term *lontar*, which is an inversion of the word *rontal* meaning “leaf” (*ron*) of the “*tal* tree” (*tal*). (“*Illuminations*”, “7 Leaves of Palm : Balinese Lontar” A 4 版, 160pp, 1996, P.129).

“tal” は, “lontarpalm” (“*Oudjavaansch-*

*Nederlandsche Woordenlijst*” (古代ジャワ語・オランダ語語彙表), N.V.Boekhandel en Drukkerij voorheen E. J. Brill, Leiden) のこと, 即ち, パルミラヤシをいう。ron は, ジャワ語 (Krama 体) でも葉を意味する。

tal との名は, タリポットヤシ (コリファヤシ) のサンスクリット名から来たものとされる点は誠に興味深い。

筆者は, 先に, バリ島のロンタル写本について調査を行い (1993年3月25日(月) ~ 3月31日(月)), その成果の一端を「バリ島のロンタル文書について」(『国語教育論叢』, 第3号, 1993年8月) において発表した。今回, 再調査の機会を得たので (1998年3月30日 ~ 4月6日), ここに改めてこれを取り上げ, 次の点について言及したい。

- (1) ロンタルのヤシの木について
- (2) その葉リーフの調製方法について
- (3) 写本の作成方法について
- (4) 写本の形態について
- (5) 写本の内容, 保存・研究機関について

### 1 ロンタルのヤシの木

ロンタル・ヤシは、英名パルミラヤシ *Palmyra palm*, 即ち、学名 *Borassus flabellifer* Linn., 邦名オウギヤシ, ウチワヤシをいう。雌雄異株で、掌状葉を付ける樹高20~30メートルのヤシである。

インドネシア語でロンタル *lontar*, バリ語でアントール *ental*と発音する。ラテン語の“*Nama toemboeh-toemboehan di-BALI*” (グドン・キルティヤ図書館蔵, AI/322) に, “*Bali: Ental. Melajoe: lontar. Latin: Borassus flabellifer L.*”と見える。

このヤシは、マライでも *Lontar* というが、ジャワ語やスリランカでは *Tal*, 南インドのタミル語 (マドラス) では *Pannei maram*, また、*Nunkup panai* という。

ロンタルヤシ, 即ち, パルミラヤシの原産地はアフリカであり, これが, インド亜大陸, インドネシア, タイ, その他の南アジア, 東南アジアに伝播し, 分布していったとされる。インド, また, それ以東に伝わって行った時期については問題がある。

ハーネリ A. F. Rudolf Hoernle は, “*An Epigraphical Note on Palm-leaf, Paper and Birch-bark*”, *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, LX IX, Pt. I, No.2, 1900) において, 次のように述べる。

即ち, インドにおける写本を調査した結果, 書写素材として, コリファヤシに替わってパルミラヤシが用いられたのは, (16世紀末~) 17世紀初~19世紀初頭 (ベンガル, オリッサ等の東部インド地方) という, 比較的近代のことである。パルミラヤシは, コリファヤシより格段に有益なものだから, インドに導入されたなら直ちに栽培され, 流布し, 活用されるはずである, この活用以前に, ひとり書写素材としての用途のみが早くから存在していたはずはない, 書写に用いられた時点は, その導入時の直後である, —と。

書写に用いられた時期は, その導入直後のはずであるから, インドにこのヤシが伝播したのは, そ

れとほぼ同じ時期であろう, というわけである。

しかし, この結論は誤っているのではなからうか。詳細については別に述べるが, 漢訳仏典や仏書音義の類を分析すれば, 遅くとも中国の唐代には, インドにパルミラヤシが存在していたと推測される。仏典を検討すれば, それは, 更に, 3世紀にも遡るであろう。それどころか, 南インドのマドラス *Madras* にある *Institute of Asian Studies* の V. Ganesan 氏の御教示によれば, 紀元前2世紀の文学書 *Paripatal* や *Tamil grammatical text*, *Tolkappiam* には, *Panai*, 即ち, *Palmyra* パルミラヤシについての言及が行われている, とのことである (1998年6月30日付 E-mail)。

インドから東への伝播も, それに準じてかなり古くに遡るであろう。

さて, このヤシは, タイでは, 水田地帯でも植えられているようだが, どちらかといえば, 山岳地の斜面, 砂質の勝った乾燥した地質に強く, むしろ, こうした地域に栽培され, 自生することが多い。タイの各地, スリランカのジャフナ半島, ペニンシュラ半島, デルフト島などにおいて, それが認められる。

バリ島内では, 東部のカラングッセム県 *Karangasem* の東北部, チュリック *Culik* からトゥランベン *Tulamben*, ティアニヤル *Tianyar* の辺りに多く見られ, 北部のブレレン *Buleleng*, その他にも散見している。他方, バリ島の南部や南東部には, このヤシは見られない。デンパサル周辺など, この木は全くないという。その好む地質・気候が異なるのであろう。[図版A]

バリ島は, 赤道直下に位置し, 4~9月は東からの季節風の影響で乾季となり, 10~3月は西からの季節風で雨季となる。雨季には, 一日に数回のスコールがある。

ロンタルヤシの花は, 1年に1回, 1月頃に開花する。折しも, フィールド・ワークを行った, この4月上旬前後にはその実が熟する時期であった。

#### [図版B]

東部のカマサン村 *Kamasan* に移動する途中 (3月31日), 3本ほど並んで立つロンタルヤシの木 (雌木) を見かけたので, 近づいてみると, 地面にたくさんの実が落ちている。熟して自然に落下したのである。落ちたばかりのものもあれば, 落ちてからかなり経ち, とっくに表皮がむけて種だけになっ

たもの、更には、発芽して30センチ前後の苗になっているものもある。熟した実の2, 3つを拾ってみると、パイナップルかパパイヤか、そうした何かの熟したような甘い匂いがする。余りにも強烈で、傍らに置いておくと、その内、頭痛がしてくるほどである。

実は球形で、直径は10~12センチである。実の、黒い外果皮には細い縦縞模様があり、これは笹の葉状に縦に裂けやすい。これを剥くと、内側には真黄色の繊維質の果肉が詰まっている。果汁も豊かである。果肉の中心部に、無数の白い糸筋状の繊維に取り巻かれた硬い種子が3個(時に2個)位置している。扁平状のやや丸い形である。計測しにくいのが、大体、直径7センチくらい、厚さ4, 5センチほどである。[図版C, D]

黄色い果肉や硬い種子には、しかし、蛾の幼虫とおぼしい白い(2, 3ミリ~)7, 8ミリのウジ虫が、無数に潜り込み、活発にうごめいているのには驚かされた(これは、やがて、5, 6ミリのサナギとなる)。蜜のような果汁を求め、アリもたかってくる。

後にチュリック Culic を通り掛かった時には(4月3日, 10時前)、村の1軒の農家 Nyoman Gili 氏宅に立ち寄り、(やや未熟な)実の着いた50センチほどの房を2房、木(雌)に登って切り落としてもらった。木の高さは20メートルほどであったろうか、作業場の脇にそそり立つ高木の内の1本で、これを、ナタ1本を腰に差し、素手素足で登るのである。房は大きく、かなりの重量感がある。実は、1房に13~15個ほども着いていたろうか、小さければ、直径は10センチ、大きければ、同じく14センチもある。全体に丸いが、頭頂部が少し窪んでいる。[図版E, F, G]

実の外果皮は、褐色をとどめる頭頂部を除けば、既に、黒色を呈している(もっと以前の未熟な時は青緑色である)。ナタで、実の上方4分の1か3分の1辺りを横断してもらおうと、果肉は未熟で、白っぽい。中ほどの3ヶ所の胚乳部(即ち、3ヶの種子)は、未だ、半透明のゼリー状で一部は液状でもある。1人の男性が台所からスプーンを持ってきて、これですくい出して食べるのだという。あっさりとした甘さでおいしい。プヨプヨした舌ざわりである。試みに、後に熟して黄色くなる白い繊維質の部分を含めてみると、渋い味がする。[図版H]

この実は、3ヶ月前に花が咲いたものだというが、

もう少し実が熟すると、この胚乳(部)は、もっと固まる。その時分には、ナイフでえぐり出し、白い薄皮をむいて食べる。タイでは、これをビニールの小袋に入れ、路端でも売っていた(1998年5月6日・8日)。この胚乳(部)は、更に硬くなり、やがて、種子となる(開花後、6ヶ月ほど所要)。

ロンタルヤシ(パルミラヤシ)の実も大きい方であるが、マンゴーやパパイヤ、ココナッツやジャック・フルーツ、ドリアンなどと違うのは、その形が球形で、真ん丸に近い点であろう。黒く艶々しているから、その丸いことが、一層、実感され、そこから、この果実は女性の乳房に似ているといわれる。

『ラーマヤナ』の物語には、王子ラーマが、魔王ラーヴァナに連れ去られた妻のシータを恋い焦がれる場面があり、そこではこの果実が契機となっている。

なお、ロンタルヤシの花序液からはトゥアック Tuak(醸造酒)やアラック酒 Arak(蒸溜酒)、砂糖が造られる。といっても、今、砂糖は作らないという。花序液は、1月から6月くらいまで採れる。そこらの村の男性どもは、この時分、土間のカマドで、何時とはなく Tuak などを造り、結構、嗜んでいるようである。

花序液は、米の磨ぎ汁のような半透明をしており、小虫やゴミも浮いている。朝採ったこの生汁を3時間ほど火にかける。チュリック辺の道端の小さな店(食品・雑貨)でも、その今年もの、昨年ものなどを売っている。アルコール分30パーセントくらいのきつい酒だが、今年ものなどは熟成が足らず、青臭い味である。[図版I, J]

## 2 書写用リーフの調製

ロンタルヤシを書記に用いるのは、その葉が厚いからだという。ココヤシの若い白い(薄いタマゴ色)葉も祭壇の飾り物や細工物に用いられるが、書記には向かない。屋根材のニツパヤシなども薄くて使えないようである。

バリ島の東部・東北部の農家では、昔から、ロンタルヤシの木を植え、花序液や実(胚乳)を飲食に供し、その葉や幹を採取・利用するなど、色々と生活に役立ててきた。

チュリック Culik 辺りを通り掛かると、あちこちの農家の庭先や垣根などには、葉柄の先から切り取られてきたロンタルヤシの若い葉が、扇状に広げ

られ、天日のもとで干し、曝されている。新芽が伸び切り、今、葉を開こうとするかしないかの時分の若い葉を用いる。葉は、まだタマゴ色で、これが広げて曝されると白くなっていく。沿道の小さな雑貨店兼食品店などのようなところでは、干し上げられて後の葉が束にされ、売られてもいる（需めに応じてトゥアックも売る）。束の周囲1.45メートル、葉の長さ1.20~1.40センチくらい、葉の幅2.0~4.0センチである。この葉の1束は10万ルピーで、その内の1枚は2,000ルピーである。時に、1米ドル（129.08円）は7,414ルピー（3月28日）~8,000ルピー（4月8日）といった相場である。[図版K, L]

村人は、ナイフやハサミでこの葉を切り刻み、祭壇の供物飾り、祭礼時に立てる竹の先の飾り、土産物の花・鳥細工、帽子、箱、タタミ、敷物など様々なものを作る。

飾り物や細工物にするには、その曝したままの葉でよい。しかし、書記用としてこれに字を書くためには、この葉を“ゆがく（煮る）”という過程が必要である。

東部のクルンクン県 Klungkung のクルンクン、また、カラングッサム県 Karangasem のアンラプラ Amlapura やトゥガナン Tenganan では、チュリック近辺から曝した葉を買い入れ、ロンタル Lontar の小品を作り、観光客向けの土産品として売っている。

そうした写本を、代々、家内工業的に作成してきた御家庭の1つ、クルンクン県のカマサン村 Kamasan の Ida Ayu Ngurah さん宅（住所：Br. Tabanan, Kamasan, Klungkung）を訪問し、書記用の葉リーフの製作方法を尋ねた。解答は、おおよそ、次のようであった。

- ① 上に述べたような若い葉を天日に3、4日曝す。葉は白くなる。
- ② 葉の両端（先端・末端）の不要部分を切除する。但し、節葉の中脈 midrib の付いた二つ折のままである。
- ③ 全体を閉じ、紐で結わえ、丸くたわめ、鍋に入れて、24時間くらい、弱火にかけてゆがく。鍋には、水だけで何も加えない。[図版M]
- ④ ゆがいた後、葉は、大体、朝から夕日の時分まで、天日に12時間くらい、干す。
- ⑤ 干した後、節葉の中脈を切除し、葉は、ほぼ同じ大きさに切断し、尖った鉄棒（長さ19センチ

くらい）で所定の位置に3穴を穿つ。穴径は3~5ミリ。

この折は、バリ暦 Bali Calendar の小品の製作中であつた。このロンタルの葉は、長さ26.5センチ、幅3.7センチ、竹製の表紙の長さ26.8センチ、幅3.9センチである。

- ⑥ トパサン Tepesan（締め枠）に積み重ねていき、100~200枚ほどになったところで、トパサンの両端のねじ金具をしっかりと締め、全体を圧縮する。毎日少しずつ圧縮する。[図版N]
- ⑦ 4ヶ所の小口の部分をそいで整形する。
- ⑧ 小口の部分に赤い顔料を塗り、乾かす。  
顔料は、今日は、壁に塗るペイントでもよいという。

- ⑨ 葉リーフを締め付けたままのトパサンは、リーフが必要になるまで、このままに置く（3~4ヶ月）。リーフの反りや歪みを取るのである。

訪問したのは3月31日（火）の11時55分から14時15分までであったが、現に、この折にも、裏手の土塀際の石組みのカマドには鍋が掛けられ、葉がゆがされていた。鍋は丸い真鍮製の筒鍋で、直径36センチ、深さ17センチである。鍋の蓋を取ってみると、葉の上には、押えとして、使い古しのレンガが載せられていた。ゆがくのは、葉の組織を安定させ、柔軟にし、また、書き易くするためだという。[図版M]

また、⑥で、ねじ金具の付いたトパサン（締め枠）を用いない方法もある。束ねたリーフの上下に竹・板の表紙を重ね置き、3穴の部分に竹串を刺すのである。頭部をやや太くして後は細くした長い串を、1穴に2本、上下から互いに刺し交わす。頭部を軽く叩いていけば、全体は徐々に締まっていく。この後、小口にペイントを塗って、しばらく放置する。そこの農家でロンタルの小品を作る場合は、この方法で十分である。[図版O]

カマサン村は、16世紀から18世紀のバリ島に覇をとなえたゲルゲル王朝 Gelgel、その後（18世紀）のクルンクン王朝の文化・伝統芸術を伝えており、昔ながらのロンタル製作、古典文学、仮面劇・影絵、金銀細工、絵画、機織りなどが伝承されているとされる。

### 3 写本の作成

ロンタルの葉リーフに字や絵を筆刻するには、パ

ングルパ Pangrupak（または、Pengrupak, Pangutik）と称する鉄製の筆具を用いる。細長い角板の先端の鋼に斜めに幅広の片刃が研ぎ出されていて、ちょうど、日本の切り出しナイフをうんと細身にしたような形体である。前回にグドン・キルティヤ Gedong Kirtya 図書館で入手した1本は、長さ15.4センチ、幅1.0センチ、厚さ0.3センチで、尾部が細く巻き上げられている。[図版P-1]

今回ののは、長さ10.7センチ、幅1.1センチ、厚さ0.35センチであるが、中ほどから末（3.6センチ）は細くなっていて柄（木製）を差し込むようになっている。これは、トゥガナン村の中年男性が実際に用いていたものであるが、彼は、このまま柄をつけないで使用していた。[図版P-2]

文字や絵は、こうしたナイフの刃の背の先端で書く（筆刻する）。写本の場合、普通、リーフの表裏に筆刻する。[図版Q]

バリ島のブラフマナ祭司の家では、真鍮の薄板（長さ36.6センチ、幅4.6センチ）に祖先からの系譜を綴り（バリ語、本文5行）、ヒンドゥー教の聖花睡蓮などを刻んだりするが、これにもパングルパが用いられる。

トゥガナン村は、ヒンドゥー教時代前からの原バリ人、バリ・アガ Bali Aga の村として知られ、この一帯は特別保護区となっている。村には、集会場、小学校、市場などがあり、伝統産業として、イカット Ikat の一種のカンベン・グリンシン Kamben Gringsing、籐の一種ロタン Calamus で編んで作った大小の籠・容器、その他の民芸品などと共に、ロンタルの小品を作成・販売し、他に卸してもいる。織物や藤細工は婦人、ロンタル製作は男性の仕事らしい。闘鶏用のシャモの鳴き声がかまびすしい。

ロンタルの小品は、数枚のラーマーヤナ物語 Rāmāyana の一節、護符、バリ・カレンダー、壁掛け、コミックなどで、観光客向けの土産物のようである。年長の少年や中年男性たちは、各自、1メートル四方くらいの簡単な屋台とイスを用意し、精を出し、あるいは、暇に任せて小品を作っている。屋台の上には、作品の4、5点、多ければ30点近くも並べられている。筆刻の技術にはそれなりの巧拙が見られるが、彼らの用いているパングルパは、中古の金ノコを折半して先端をナイフ状に研ぎ出した、長さ18センチくらいのものである。中ほどにビニール糸などを巻き、持ち易くしてある。[図版R]

こうした小品は、同じくクルンクン県のシドゥム Sidemen 村の辺りでも作られている。標高3,142メートルのアグン山 Gunung Agung の南中腹の谷あい懐かれた村々は、湿気が多く、ロンタルのヤシそのものは生えていない。その小品作りの素材は、チュリック Culik 辺りが適地だという。

ロンタルのリーフに字や絵を刻んだ後、その線刻部分に炭を擦り込む。この炭は、ケミリ Kemiri の果実を真っ黒に焼いたものであり、それを指で、葉リーフの表面に押し潰すようにして擦り込んでいく。石油（昔はヤシ油）を混ぜると虫除けによい。擦り込んで後は、布や古新聞で余分な炭をふき取る。炭を塗布する作業は、筆刻後のリーフの数枚をまとめて行う。

ケミリの実には、外果皮、その下の薄殻（縦4センチ、横幅3センチ弱、厚さ2.5センチくらい）と果肉、次の硬殻（縦3センチ弱、横幅2.5センチ、厚さ2.1センチくらい、硬殻の厚さ2～3ミリ）、中の胚乳部からなる。硬殻を割って出てくる胚乳は、白く、脂肪分が多い。これを焼いて炭化させ、炭として用いるのである。[図版S]

ケミリ kemiri とは、トウダイグサ科アブラギリ属のククイノキのことである（末永晃著『インドネシア語辞典』、1992年8月、大学書林、302頁）。

学名 *Aleurites moluccana* Willd., 英名 Candlenut Tree, Vernish Tree, Moluccan Oil Tree, 常緑で20メートル余の高木となり、雌雄同株、マレーシア東部の原産といい、種子から乾性油 (Tung-Oil) を採って灯火用、その他に利用するため、熱帯に広く栽培され、また、硬い種子殻はネックレスなどの細工物に用いた（『世界有用植物事典』、1993年4月、平凡社、その他）。これがその木だという、その木の下に行って実を拾ったが、余りにも高木で、上の方の様子はとんとわからない (Sidemen 村)。

炭を塗布した後のリーフは、綴り束ね、前後に表紙を付け、紐を通す。紐の両端には、古銭などを付けて止めとする。表紙は、小品の類なら、手近の竹材を用いる。大切な写本ならチーク材、黒檀 (烏木) 材などを用い、あるいは、表紙を付けないで、箱函 (木製収納ケース) に納める。

表紙や箱函には、ヒンドゥー教にちなむ絵模様を彫ったり、植物 (睡蓮) の浮き彫りを施し、また、金、朱色等で塗装を施すことも多い。

なお、リーフに3穴は穿つが、これらを束ねて作成される写本は、その中央の穴にのみ紐を通す。写本の底部(下)から上に向けて貫き通し、長く余らせた紐で全体を4, 5回巻き、上部で止める。箱函が付いておれば、巻くことはなく、紐は左右にゆったりと折り納めるが、やはり、写本の中央の穴にのみ、紐を通す。本来からこうであったかどうかかわからないが、これが原則である。

#### 4 写本の形態

写本の形態には様々なものがある。その一部についてはこの前後にも述べるが、一番基本的な問題は、リーフの大きさである。

リーフの、たまたま計測したものでは、長いものは、45.5センチ、短いものは25.0センチで、この間に、または、恐らく、この前後に、様々な長さのものがある。

リーフの幅は、4.0センチから3.1センチである。大体のところは、3.5センチ前後と見られるが、4センチを超えるものは極めてまれであると判断してよさそうである。これは素材のロンタルヤシ(パルミラヤシ)そのものに規制される所であり、コリファヤシの写本との大きな相違点となる。スリランカのコリファヤシの写本には、5センチ幅や5.5センチ幅のリーフが用いられている。

さて、トゥガナン村在住の I Wayan Muditādñana 氏は、国家的に著名な特別の Balinese letter-writer、即ち、伝統的なロンタル写本の製作者であり(住所: Tenganan, Bali, TEL. (0363) 41178)、奥方は、熟練したカンベン・グリーンシン(イカット)の織手である。[図版T]

同氏より、同氏が10年ほど前に書写された『バラタユダ Bharata Yudha』(マハーバーラタの翻案)のバリ語写本(新写)を譲っていただいた。これは、この地のロンタル写本の伝統的な形態の一つと見られるので、次に、この写本の形態を記しておく。[図版U]

箱: チーク材、合子形式、身は一木を彫り込む、彫刻あり。

蓋の外寸: 長さ50.4センチ、幅6.9センチ、厚さ2.5センチ。

身の外寸: 底の長さ54.4センチ、上辺の長さ50.4センチ、幅6.9センチ。

身の内寸: 長さ45.0センチ、幅4.0センチ。

リーフ(葉): 長さ44.9センチ、幅3.5センチ、表裏(両面)に筆刻、一面4行、3穴、中央の1穴に紐、小口に朱を塗り金泥でつる草模様、首・尾それぞれはリーフ3枚を張り合せて1枚とする、これらの2枚を入れて、計86枚。

『マハーバーラタ Mahābhārata』は、古代インドの国民的叙事詩で、この題は「バラタ族の戦争を物語る大史詩」と訳される。翻案されては、その周辺国には多大な影響を与えている。バリでは、その中のコラワー一族とパンダワー一族の最後の戦いの部分が、ムプ・セダ Mpu Sedah とムプ・パヌル Mpu Panuluh によってカウイ語 Bahasa Kawi の韻文、即ち、カカウィン Kekawin で翻案されており(サカ暦の1079年、西暦1157年)、これを「バラタ・ユダ Bhārata yuddha」(バラタ族の戦争)という。

しかし、写本には、箱函は、必ずしも用いない。小冊なら、表紙で挟む程度でよからう。Usada Sari (医薬植物の書)、Camplutala (スピリチュアル医学書)、Pamasah (ブラックマジックを防ぐマントラ)、Kaputusan 関係など、大体、そうである。

写本が大冊になれば箱も必要であろう。中には、合子の身の部分を2層に分けて彫り込み、写本を2分して納める場合もある。

小冊でも、表紙を用いないことも多い(この方が日常的な形態であり、古い様式の一つでもあろう)。例えば、節葉の中脈の付いた二つ折のままの葉を切って作製した Kertabas (辞書)がある。長さ34.4センチ、幅3.1センチで、左下角に1穴を開け、リング状の紐を通してある。二つ折のそれぞれは、第1面と第4面にだけ文字が刻されている。酷使に耐えるように配慮されたものであろう。[図版V]

なお、トウンマラ類(護符)は、おおむね、一枚ものであり(長さ39.8センチ、幅3.8センチくらい)、魔除け、息災、長寿を祈る、幸運を祈る、知恵と学問の神ガネーシャに祈る、などの目的別に作製し、家、壁、仕事場、畑の脇などに貼っておく。

#### 5 写本の内容、保存・研究機関

ロンタルヤシの写本を保存し、調査・研究している主な機関としては次がある。

○ 国立文書館 Kantor Dokumentasi Budaya

## Bali

デンパサールにあって、バリ各地に伝わる古写本を複写し、コピーを作成し、また、貴重な写本（典籍・文書）の保存・修復、調査・研究等を行う国立機関（役所）である。住所：Jalan Ir.Juanda No.1, Niti Mandala, Denpasar 80235, TEL. 228593。

階段を上がった二階の右手奥にロンタル写本専用の部屋がある。ここでは、ロンタルのバリ語の歴史的・文化的資料が次のように15分類されている。

- 1, Agama (religion 宗教, 信仰) / <Mantra Astawa (礼拝の歌, 誦経・呪文)> 35 takep (封)
  - 2, Babad (Chronicle 王国の年代記<起源, 由来, 発展, 王の事跡など>) 122 takep
  - 3, Palakerta (Law 法律) 47 takep
  - 4, Niti sastra (Government 行政の文書) 17 takep
  - 5, Sesana (宗教上の規則, 礼儀, 作法) 84 takep
  - 6, Kanda (Mistery 呪術, 魔法) 392 takep
  - 7, Usada (Medicine 医学) 114 takep
  - 8, Kidung (Sacred song 聖歌, 神祭りの歌, 民謡) 92 takep
  - 9, Gaguritan (Story by singing ラブ・ストーリー, 歌う物語) 273 takep
  - 10, Parwa (Classic 祖先関係の物語, 古伝承・昔話) 39 takep
  - 11, Kekawin (Epopoe 叙事詩物語, 葬式等で歌う歌, 葬送歌, 古代ジャワ詩など) 152 takep
  - 12, Wariga (Calender バリ暦, 天文学, 占星術) 66 takep
  - 13, Tatwa (Philosophy 哲学) 423 takep
  - 14, Satwa (Story 物語, 例えば, 子供に聞かす祖先, 山, あるいは, 日本の桃太郎話のような話等) 8 takep
  - 15, Kalpa sastra (神・霊・祭礼の礼儀, お供え物の調べ方の説明) 85 takep
- 付, Prasi (Comic 簡単な漫画, 挿画の類) 1 takep

部屋には、壁に沿ってコの字型に木製架が設置されている（計13連）。各架は4段の棚を有し、各段には4個、または、3個の木箱が整然と並べられている。木箱は、やや大きめの一定の大きさで、写本のほとんどは、これに、また、一部のものはブリキ

の箱に、それぞれ数点ずつ納められている。木箱の材には、虫害に強いチーク材を用いる。[図版W]

写本は、大体、長さ50センチ以下、幅3.0センチ前後（3.5～4.0センチ）、3穴（3穴とも、やや左寄り）である。写本の素材は、ロンタルヤシと見てよさそうである。

写本の所用言語は、古ジャワ語 Jawa Kuna（または、Kuno、先のカウイ語）語、Jawa Tengahan 語、Jawa Kuno と Bali 語の混合、Bali 語、Sasak 語などである。

その後に収集され、ガラス棚などに仮置きされている未整理の写本もある。竹・木の表紙には、上述のような分類上のメモが添えられている。

## ○ グドン・キルティヤ Gedong kirtya 図書館

この図書館には、神聖な写本も納められていて、現地では Pura Museum と呼ばれることもある。この pura とは寺院を意味する。住所：Jalan Veteran 20, Singaraja, Bali.

1928年6月2日、バリの言語、習慣を研究していたオランダ人 Mr. F. A. Liefrinck と Dr. H. N. der Tuuk により、シンガラジャ Singaraja において、その基が築かれ、同9月14日、総督 A. C. D. de Graff によって開館された。

以後、バリ人の学者、高僧、支配者層、蔵書家等の協力者によって協会が作られ、ロンタルに書かれた歴史的な文学書、また、文化信条に関するその他の写本、バリ人 Balinese の言語（そのもの）を保存するため、バリ島、及び、ロンボク島 Lombok などのロンタル写本が収集されてきた。

1928年の翌年に出版された次の報告書（解説、詳細な分類、個々の書名など）は、この間の事情、また、当時の蔵書内容等を理解する上で重要である。

“Mededeelingen van de Kirtya Liefrinck-van Der Tuuk”, “Aflevering 1” (Oct. 1, 1929, Singaradja, Solo) [A5判, 71pp, オランダ語]

写本は、I. Weda, II. Agama, III. Wariga, IV. Itihāsa, V. Babad, VI. Tantri の5分類のもとでアルファベット順に整理されている。

今日における蔵書数は、破本や零本もあって数えにくいのであろうか、総計は、5,000余点といい、また、一説には、文化、宗教、習慣に関わるもの3,803点、また、その他の写本6,194点ともいう。

ここでは、ロンタルの写本は10部に分類されてい

る。特別室の木製書架の左上角から見ていくと、次のようになろうか。[図版X]

- 1, Niti sastra (Government 行政の文書)
- 2, Mantra Astawa (religion 宗教, Agama, ヒンドゥー教のウェーダ〈聖書〉で儀式の折などに祭司が誦読する)
- 3, Kalpa sastra (宗教的な礼儀やお供え物の調べ方)
- 4, Sesana (宗教上の規則, 礼儀)
- 5, T tutur (トゥトゥル) (神話, 民間伝承)
- 6, Wariga (バリの Calender 暦, 天文学, 占星術)
- 7, Usada (Medicine 医学)
- 8, ウィラ・チャリタ (勇士の物語, アスタダサ・パルワ〈18部からなる物語〉=バラタユダ, サフタ・カンダ〈7部からなる物語〉=ラーマヤナ)
- 9, Dasa nama (Ten name 10の名称, 人・物は10種類の名で呼ばれる)
- 10, Babad (王国の年代記, 歴代王の事跡)

バリ語の写本は睡蓮の花を彫ったチーク材の木箱150個に、ササク語 Sasak の写本はブリキの角箱22個に納める。木箱は、長さ66.8センチ、幅13.8センチ、高さ16.0センチ(内、台〈底板〉1.5センチ)である。合子型の蓋を取ると、内側は、長さ57.8センチ、幅11.0センチで、蓋との重なり0.5センチである。内側は2層に仕切られていて、その1層の幅は5.1~5.2センチである。前回の調査時には、多くにはブリキの角箱が使用されていたから、その後に取り替えられたものらしい。ブリキの角箱は、長さ60.9センチ、幅9.8センチ、高さ11.8センチである。ロンボク島のササク語の写本もロンタルヤシの3穴本で、「ハミールの物語」(イスラム教関係)や“Babad Mataram”(マタランの町の経歴)など、寸法は、50.9センチ×3.45センチ、あるいは、40.5センチ×2.9センチといったところである。写本類は、この他の木箱、金属箱にも納められているようである。

別に、ガラスの展示ケースがあり、この中には、貴重な999年からの Prasastis (金属・石などに刻んだ碑文)、古い木牘様文書(細長い板で、一端に紐を巻き、他端は尖る)、特殊なパーム・リーフ写本、ロンタル写本用の帙、ジャクーの木の皮を張った表紙本(長さ32センチ、幅4センチ)なども保管

されている。

Prasastis は銅板で、内容は上述の Babad や王様の村関係の規則などであり、文字は、南インドのパッラワ王国 Pallava 〈4~9世紀〉の經典文字〈グラント文字〉の流れをくむもの、言語は、バリ・クナ語(古バリ語)その他のようである。

パーム・リーフ写本の中には、インドやビルマ(ミャンマー)のものもある。前者は、ロンタル製のU字型ケース2個を上下に合わせる形式の帙を有し、文字はデーヴァナーガリである。後者の材質はコリファヤシであり(長さ62.4センチ、幅5.5センチ)、聞けば、こうしたリーフ(葉)はバリにないという。いずれも本館所蔵のロンタル写本のための参考品として置かれているのであろう。

本館は小さな図書館ではあるが、所蔵されているロンタル写本、また、オランダ統治時代関係の古い洋書類などは、質量共に、他に類を見ない貴重なものである。立地上、オーストラリアの Sydney の大学等の研究者の利用も多い。

本館の刊行物には、“Gedong Kirtya Singaraja”(1975, 14×21センチ, 14pp)の小冊子がある。

ロンタルの写本は、次のような機関にも所蔵されている(元デンパサール領事石田実氏の御教示)。

- 国立ウダヤナ大学文学部, ロンタル図書館  
Fakultas Sastra Universitas Udayana,  
Pustaka Lontar (所蔵 722部)  
Add: Jalan Nias No.13 Denpasar, Bali
- 言語調査研究所 Balai Penelitian Bahasa  
(シンガラジャ Singaraja に所在)
- バリ博物館 Museum Bali  
(デンパサール Denpasar に所在)
- ジャカルタの国立インドネシア図書館

バリ島では、この他、かつての王侯や名家の所蔵するところも少なくないと見られるが、寺院・祭司の所有になる写本も多いようである。例えば、デンパサールのヒンドゥー教寺院 Pura Kawitan, Tangkas Kori Agung (Di Desa Adat Pagan. Add: Jl. Plawa XIII/1, Br. Pagan Keled, Denpasar) に参上すると、その祭司 Jero Mangku Gede Ketut Subandi 師は寺院の裏手の一角に住まいされ、ロンタルの教典、また、真鍮の氏族の系譜などを見せて下さった。



アグン山東南部の中腹には、チャンデイ・ダサ Candi Dasa 方面、アンラプラ Amlapura 方面に流れ下る多くの沢筋がある。それぞれに村落があって、ヒンドゥー教が信仰され、祭司がそれをつかさどっている。そうした村の一つ Budakeling 村を訪れ、祭司宅二軒を訪問した（4月2日）。折しも、あちらこちらに祭礼の行われた日で、双方とも不在であったが、家人は、日常的な祭祀にロンタル写本を用いている、ロンタル写本は、普段は神事用の供物を調える家（窓は金網張り）の箱の中に納めている、今日のような祭礼があると持参していく、と話された。寺院におけるような石造りの神殿はないものの、屋敷内には9基の大きな祭壇も設けられている。ヒンドゥー教の祭司、あるいは、ブラフマナの家格に対する認識を新たにした次第である。

寺院や祭司、宗教者でなくとも、一般個人で研究や収集を目的とし、その保存に努める者もいるであろう。

一般の家でもロンタル写本（小品）を所有するところがあるようだが、これらは葬式の時に読むもの、または、死者のための秘密のもの（アジュワウエラ）と説明され、他人には見せないという。

#### おわりに

ロンタルの古写本は、早くからオランダ、ヨーロッパなどに流出していったようである。内容や形態の、貴重であればあるほど、美麗であればあるほど、流出することは多かったことと思われる。

ロンタルの写本は、バリ島の文化を維持・研究していく上で極めて貴重なものである。貴重書の中には、古代の身体寸法を伝えた特殊な古写本もある。アスタコサラコサリ Asta-Kosala-Kosali、また、アスタブミ Asta-bumi などがそれで、前者は、建物の寸法関係を規定したもの、後者は、土地や自然に関するルールを規定したもの<sup>(1)</sup>という。こうした写本などは、バリ島ひとりに限らない、人類の文化史

全体において、測ることのできない意義を有するものである。ロンタルの写本は崩壊しやすく、散逸しやすい。現存する写本の保護・補修、素材と製作技術の保持、関連する諸事項についての全的記録など、我々の当面する課題は多い。

ヤシの葉を書記素材とした写本 Palm Leaf Manuscripts は、南アジア、東南アジア、その他において作成されてきた。国々によって、そのヤシの種類が異なり、書誌学上にも色々な差異が認められる点に文化史的、文化地理学的興味を持たれよう。

ロンタルヤシについては、国際的に共通した理解が、今一つ、得られていないようである。それが如何なるヤシであるのか、どのような実態にあるのか、これらにつき、先学の間に見解の不一致、情報源の混乱などが見られるようである。現に、日本にも、インドネシアのロンタルヤシはニッパヤシであるとする説がある<sup>(2)</sup>。フィールド・ワークを踏まえ、なお、調査・検討して行きたいところである。

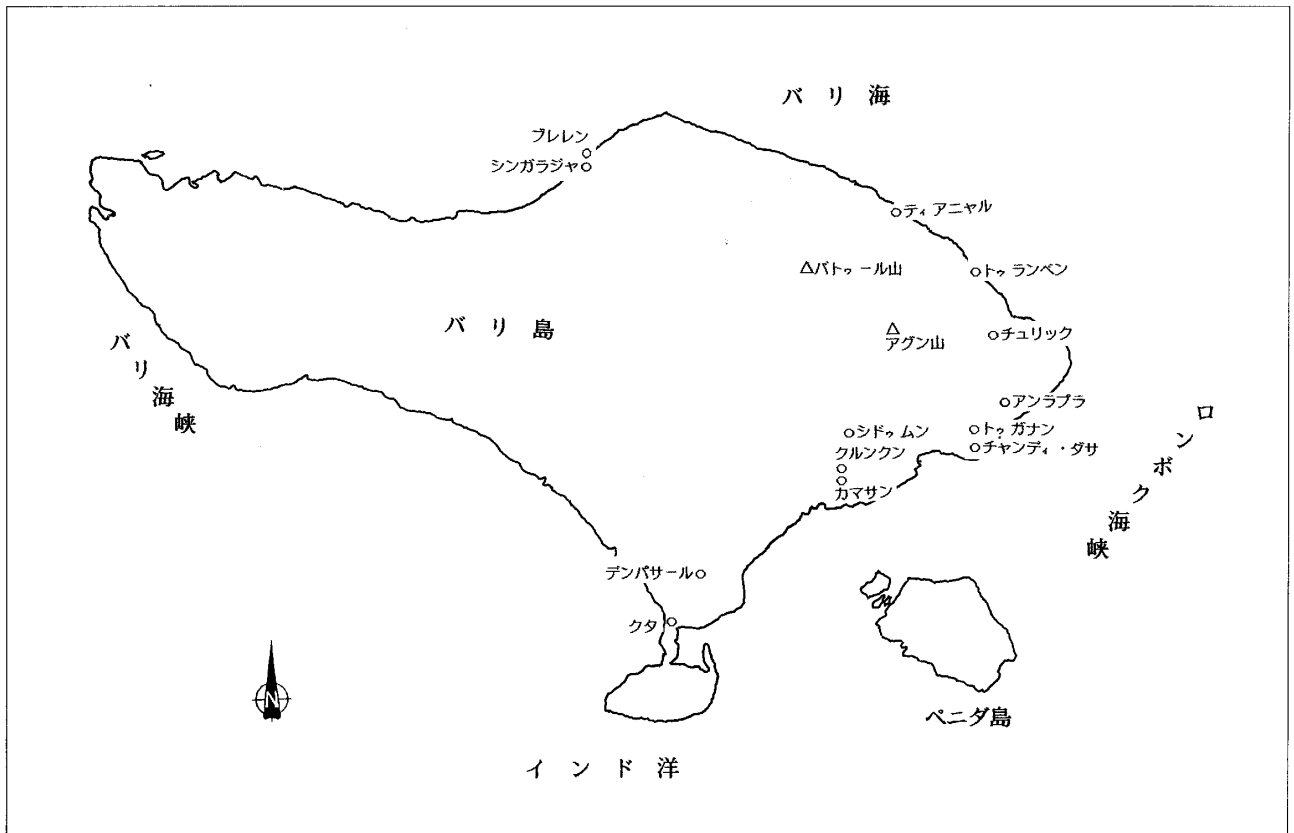
#### 注

- (1) 布野修司氏執筆「身体寸法」、『事典東南アジア—風土・生態・環境—』、1997年3月、弘文堂、222頁。
- (2) 崎山理氏執筆「ロンタル」、『インドネシアの事典』、1991年6月、同朋社出版、458頁。  
同、『東南アジアを知る事典』、1986年7月、平凡社、219頁。

#### 【付 記】

元デンバサー領事石田実氏、グドン・キルティヤ Gedong kirtya 図書館の Ida Putu Ngurah Asmara 氏、その他の方々に多くの御芳情をいただいた。厚く感謝申し上げたい。

（平成10年10月30日受理）



A バリ島



B 実をつけているロンタルヤシ



C 果実



D 果肉



E・F 木に上って房を切り落とす (チュリック村)



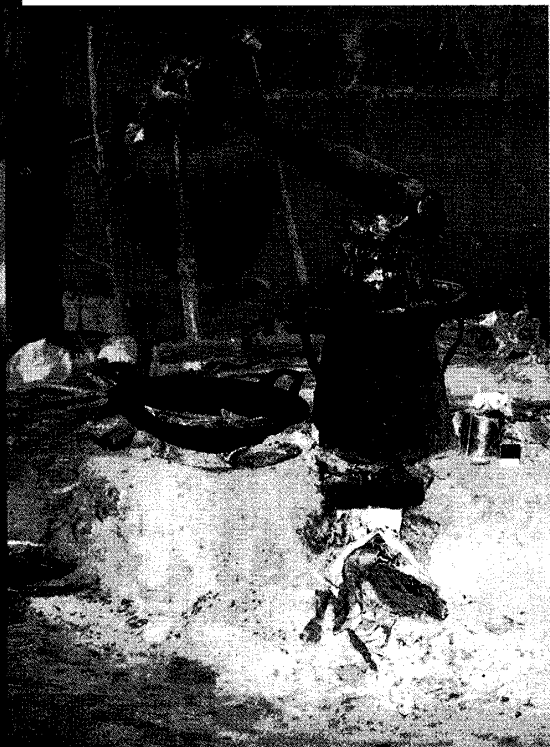
G 房をかつぐ



H 胚乳



I 花序液 (チュリック村)



J トウアック造り (チュリック村)



K 天日に干す若葉 (ティアニャル村)



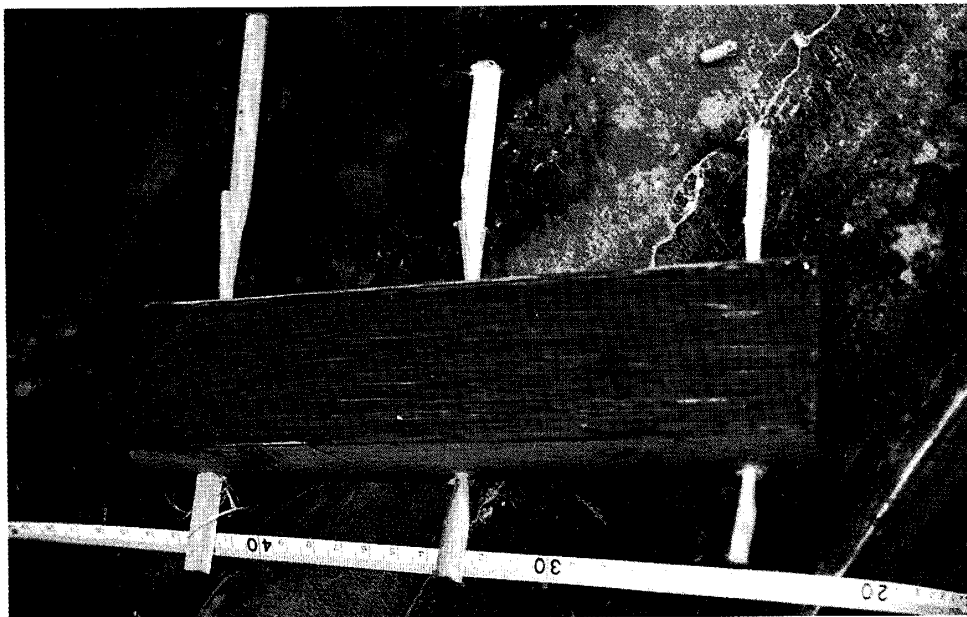
L 店頭にて (チュリック村)



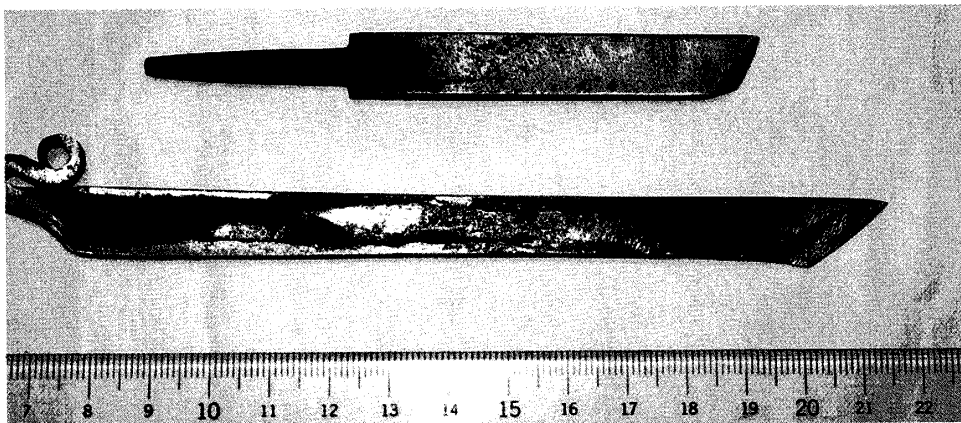
M 葉を鍋でゆがく (カマサン村)



N トパサンで締める (カマサン村)



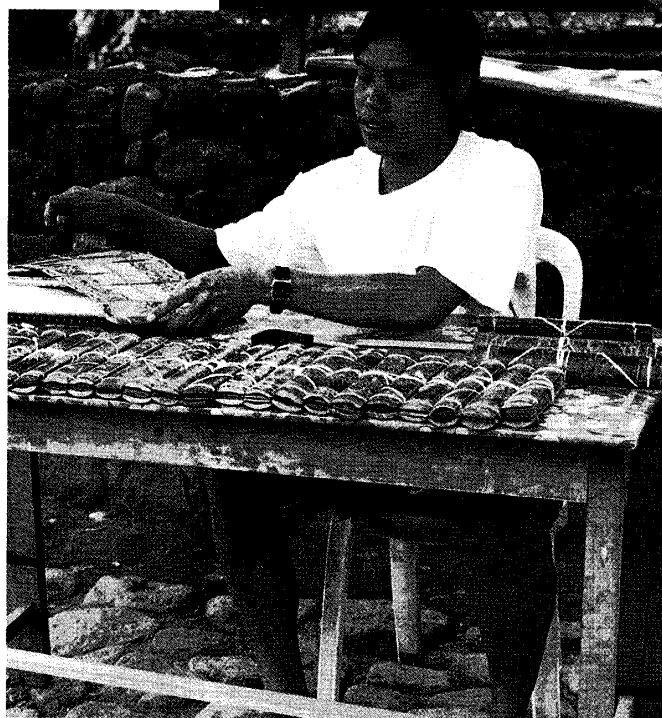
O 竹串で締める (シドウムン村)



P パングルバ (1は下・2は上)



Q 筆刻する (シドゥムン村)



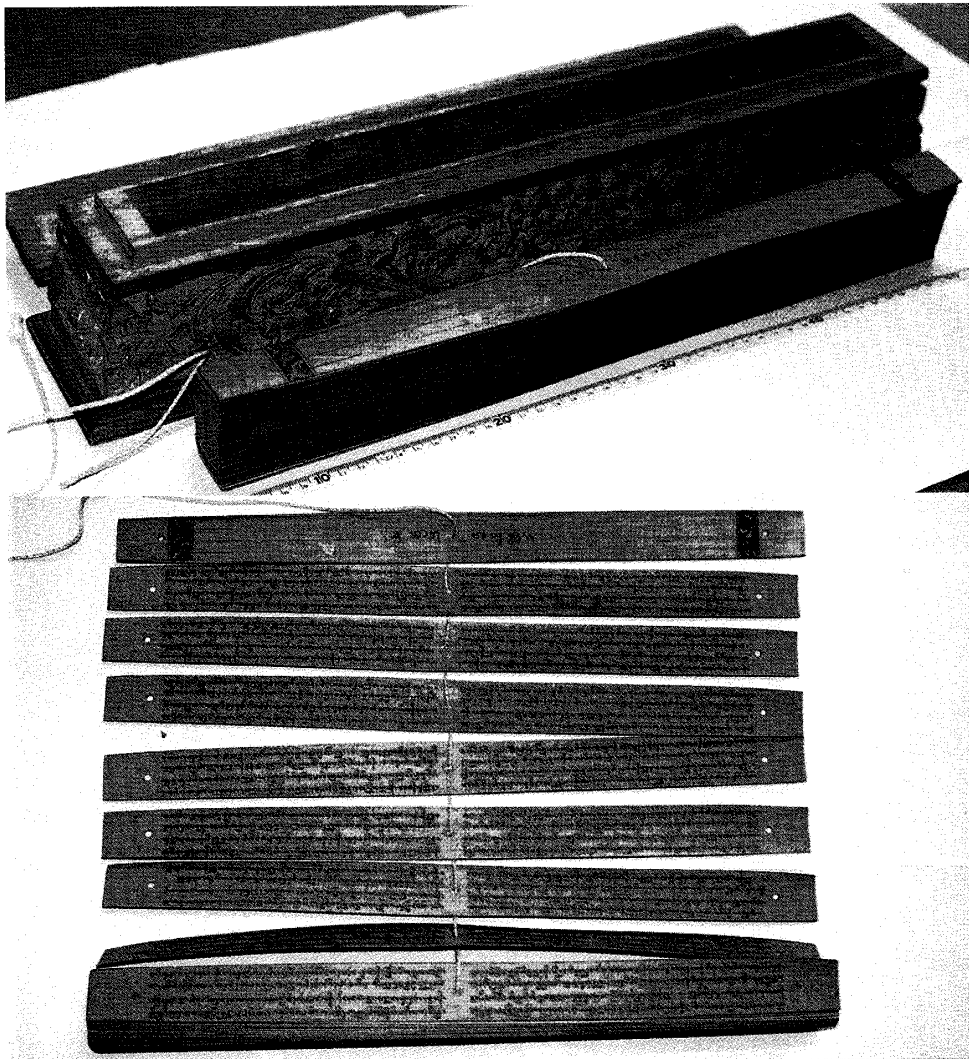
R ロンタルの小品を作って売る青年  
(トゥガナン村)



S ケミリの実 (シドゥムン村)

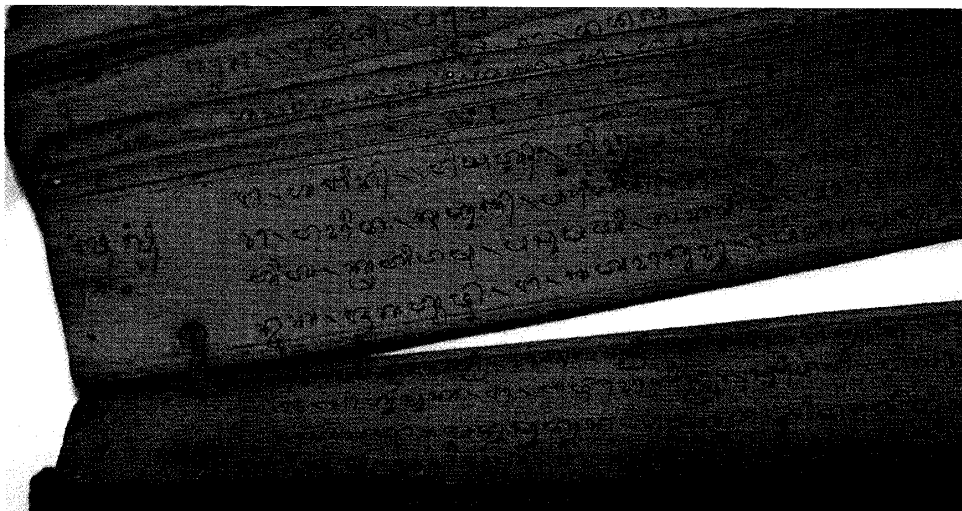


T | Wayan Muditādñana 氏御夫妻



U マハーバーラタ (バラタ・ユッタ) の写本





V Kertabasの写本



W 国立文書館 (デンパサール)



X グドン・キルティヤ図書館 (シンガラジャ)